「おさしづ」語句の探求（16）

第１巻の「個人の身上・事情」の伺いにおける「道」

おやさと研究所助教
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

今回は、「個人の身上・事情」について、すなわち、信仰者が個人的な事柄（身上の悩みや判断に困る事情など）について伺った「おさしづ」を取りあげる。「おさしづ改修版」第１巻では、「刻限」や「本部事情」の「おさしづ」に比べると、「個人の身上・事情」の「おさしづ」には、それほど頻繁に「道」という言葉が出てくるわけではない。しかし、「個人の身上・事情」についての「おさしづ」が、第１巻の半数以上を占めており、件数としては最も多く「道」が用いられている。したがって、その傾向を概観しておく必要があるだろう。それは、個人に関する指図であるため、共通の脈絡や特徴を具体的に見いだすのは困難であるが、ここでは大まかな傾向を確認することにしたい。

件数

第１巻において、「個人の身上・事情」についての「おさしづ」は、全部で659件ある。そのうちで、「道」という言葉が３回以上用いられているのは、２割弱の118件である。その推移をグラフにすると、図１のようになる。

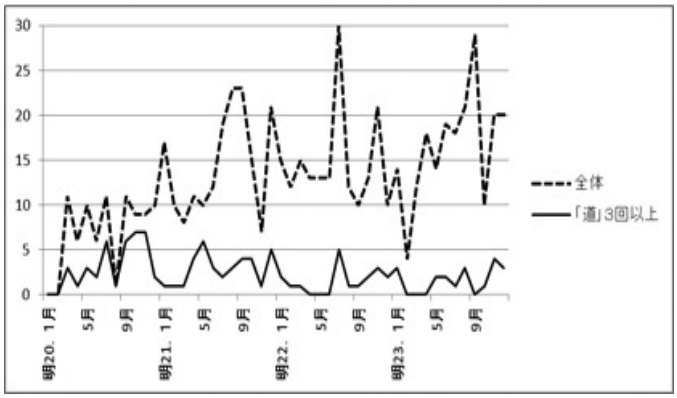

図１　「個人の身上・事情」の件数の推移

破線で示した、「個人の身上・事情」の「おさしづ」の件数は、明治21年以降増えているにもかかわらず、「道」が３回以上用いられる「おさしづ」は、明治20年の中頃から明治21年の初めごろまでが一番多く、その後減傾向にある。

ちなみに、明治20年から21年の初め頃までは、「刻限」や「本部事情」などにおいて「道」が３回以上用いられる「おさしづ」はほとんどない。第１巻で「道」が３回以上用いられる「おさしづ」だけを取り出して並べると、明治21年の初めまでは「個人の身上・事情」についてのものがほとんどだが、「東京へ出張の上、本部を設立するの運びに掛かる」ことになる明治21年３月９日の「おさしづ」を境にして、「刻限」や「本席の身上伺」あるいは「本部事情」の「おさしづ」が増え、それに対して、「個人の身上・事情」の「おさしづ」が減っている。

こうした件数の推移からすると、明治20年にはおもに「個人の身上・事情」の「おさしづ」で説かれた「道」を用いた諭しが、明治21年３月以降は「刻限」や「本席の身上伺」あるいは「本部事情」へ、その諭し場を移していると見ることができる。

頻繁に名前の見られる人物

次に、どのような人物の伺いの「おさしづ」に対して「道」が多く用いられているのかを確認したい。「個人の身上・事情」の「おさしづ」には、第１巻全体で145人の名前を見ることができる（第７巻補遺にもこの時期の「個人」に対する「おさしづ」が多くあるが、ここにそれは含めていない）。「道」が３回以上用いられている「おさしづ」において、そのうちの約４割にあたる59人の名前がある。参考までに、最も多く出てくる人名と、「道」の「おさしづ」の多い人名をそれぞれ10人挙げると、表１、表２のようになる。多少入れ替わっているところもあるが、人名の件数においても、人名別の「道」が用いられる「おさしづ」件数においても、同じような名前が見られる。ただし、教会本部の設置認可やその後の取り扱いに東京へ出張するなど特異な役割を果たした桝井伊三郎や松村吉太郎の名前が、「道」が用いられる「おさしづ」にあまり出てこない。また、「道」の用いられる「おさしづ」の10人中６人までが、増野正兵衛、梅谷四郎兵衛およびその親族であることも目を引くが、これは二人による伺いにおいて親族の名前がしばしば登場していることによる。

表１「個人」の「おさしづ」全体にあらわれる人名件数

人名	件数
増野正兵衛	123
清水与之助	65
梅谷四郎兵衛	41
平野楢蔵	38
桝井伊三郎	32
松村吉太郎	29
平野トラ	22
増野いと	22
井筒梅治郎	17
梶本松治郎	16

表２「個人」のうち「道」が３回以上用いられる「おさしづ」にあらわれる人名件数

人名	件数
増野正兵衛	31
清水与之助	12
梅谷四郎兵衛	12
増野いと	5
梶本松治郎	5
春野千代	4
平野楢蔵	3
井筒梅治郎	3
梅谷たね	3
梅谷秀太郎	3

とはいえ、ここに挙げられているのは、当然のことながら、頻繁に「おさしづ」を伺うことができた人物、すなわち、頻繁にお屋敷に滞在していた信仰者であり、中でも特によく名前が多く出てくる増野、梅谷、清水の各氏は、教会本部設置の認可に関する運動や、その後の教会本部において重要な役割を担った人物である。そうした、教会本部の中心となるような人物に、「道」の「おさしづ」が多いのは、「刻限」や「本部事情」において「道」が頻繁に用いられていることと重なるところがある、と言うことができるだろう。

以上のように、第１巻において「道」が用いられる「おさしづ」は、明治21年３月９日までは、ほとんどが「個人の身上・事情」についてのものであるが、それ以降、教会本部の設置認可や教会本部のおぢばへの引き移しという脈絡において、「刻限」、「本席の身上伺」あるいは「本部事情」に多く見られるようになる。一方、「個人の身上・事情」において、「道」という言葉は、教会本部の重要な役割を担う個人による伺いの「おさしづ」に多く見ることができる。このことから考えると、「道」による諭しは、諭しの場は変わるものの、明治21年以後も同じような人に対して説かれていたと言うことができるかもしれない。